円弘撰『妙法蓮華経論子注』研究史概観

金　炳　坤

一　序言

僧祥撰集（八四五年以後）[1]『法華経伝記』にみられる、真諦三蔵（四九九―五六九）の云う「西方相伝」（『大正』五一・五二下―五三上）によれば、五天竺において『優婆提舎』を造り《法華経》の文義を解釈する五十余家があったというのであるが、周知のとおり、今日に伝わるのは、婆藪槃豆造『妙法蓮華経優婆提舎』（以下、『法華経論』）のみである。

これが権威あるインドの論師、ヴァスバンドゥ（Vasubandhu）に帰される《法華経》に対する現存する唯一のウパデシャ（Ūpadeśa）であること。この点が、東アジアの仏教界において本論が重視された最たる所以であるだろう。[2]関連して一筆加えるならば、久留宮圓秀氏によって指摘されているように、[3]本論において示される「十七種名（十七種の法華経の異名）」（『大正』二六・二下―三上）が、梵文法華経写本のコロフォン（Colophon）の中に見出されることも、本論がインド撰述であろう蓋然性の高いことを物語っていると言えよう。

そして、本論の中には、表面上《法華経》の中には出てこない「仏性」の語がしばしばみられ、それが釈者によって読み取られていること。この点は「晩見法華論」[4]といった表現を用いるなどして、本論を重用したことで知られている嘉祥大師吉蔵（五四九―六二三）によって注目されていたところである。[5]併せて、梁代における法華講経の独歩的な存在として誉れ高かった（『大正』三四・三六三下）、光宅寺法雲（四六七―五二九）の法華経批判に対し、[6]彼がこれを論破するためによりどころとした最大の論拠というのが『法華経論』であったということも、[7]多くの先学によって指摘されているところである。[8]

さらに、本論のいわゆる「四種声聞」（声聞有四種、『大正』二六・九上）の段において説示される「根未熟」のことを「不熟」に解するなど、[9]「一分不成仏」[10]に立場をおいていた、慈恩大師基（六三二―六八二）の『妙法蓮華経玄賛』の場合も、勝呂信静氏が「解釈における教理の大綱は、全面的に世親の法華論によっている」[11]と指摘するように、本論に大きく依拠していたこと。それから、余りにも有名な「法華七喩」の典拠というのも、実は『法華経論』（七種譬喩、『大正』二六・八中）であるということも、知る人ぞ知るところではないだろうか。[12]

さて、勒那摩提や菩提留支などによって、五二八年以前[13]には漢訳されていたものとみられる『法華経論』を、果たして誰が最初に引いたのか（法上〔四九五―五八〇〕か）[14]という問題は、筆者の興味をそそる研究課題の一つであるが、[15]とかく、中国にあっては、隋の三大法師[16]あたりからその本格的な引用がみられ、また海東にあっては、百済の慧均（五七四年頃）[17]撰『大乗四論玄義記』がその最初の引用とみられる。

なお、『法華経論』に対する随文釈義の注釈書としては、吉蔵撰『法華論疏』三巻、義寂（七世紀後半から八世紀初め）釈・義一撰『法華経論述記』巻数不明、円珍（八一四―八九一）撰『法華論記』十巻が現存している。[18]

ところで、海東仏教初期（高麗時代以前）の法華思想を究明し得る資料としては、元暁（六一七―六八六）撰『法華宗要』[19]（完本）、義寂撰・義一撰『法華経論述記』[20]（上巻存）、義寂撰『法華経集験記』[21]（抄本存）が日本で発見され、現在に伝わるところであるが、この中で、首尾具足の形をとどめているのは『法華宗要』のみである。また、法華教学史、法華弘通史を概して、海東仏教初期の法華章疏が引用乃至は言及される事例としては、中国・海東撰述の章疏では皆無であって、日本撰述の章疏の一部の中においてのみこれが確認できるのである。[22]

このような状況下において、金天鶴氏によって新たに提示された、新羅出身の僧侶である可能性が注目されている円弘（七三三年以前か）の『妙法蓮華経論子注』（以下、『子注』）に関する研究は、これまで資料不足のために等閑視されてきた本研究分野に対し、[23]新たな方向性を示したとも、さらには、海東仏教初期の法華思想を再構築し得る新地平を開いたとも言えるであろう。

本稿は、本誌の「特集　円弘と妙法蓮華経論子注」にあたり、これまでに行なわれてきた、円弘、并びに『子注』に関する研究史を概観し得る、ビブリオグラフィーを提供することをその目的とする。

二　金天鶴氏以前の研究について――二〇一一年以前――

「子注」という「形式」を書名とする、このマイナーに他ならない文献が、人目に触れ、かつ研究対象として扱われるようになったきっかけというのは、おそらく本書が「奈良朝現在一切経疏目録」[24]（以下、「奈良録」）に記載され、これが大屋徳城氏をはじめとする関連研究者によって言及されるようになったからであろう。[25]

しかし、『子注』や『円弘師章』の撰者として知られる、生国不明の円弘に対し、「新羅人」という理解を示したの

は、金天鶴氏の指摘するように、石岡俊一氏が初めてのようである。[26] それと、現存する写本（上・下巻）を実見しての初めての言及は、管見の及ぶ限りでは、前述の大屋氏のようで、氏は次のような概要を示している。[27]

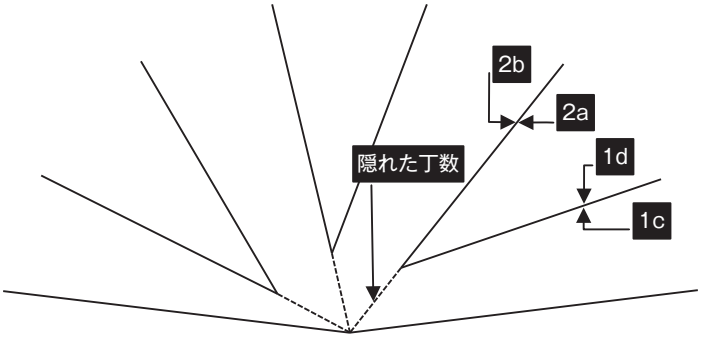
一法華経論子注（巻下）　一帖

粘葉本、本文五行、註十行「尊者舎利弗説偈、金色三十二十力（相カ）諸解脱同共一法中而不得此事」以下を注したもので、鎌倉時代の写本。撰者の名を欠くが、正倉院聖語蔵に、法華論経子注第一、一巻あり、寧楽朝末か平安朝初と思はるゝ写経で、巻首が欠けて、「論曰頂礼*大〔正の誤読〕覚海浄法無為僧」以下を存して居る。共に法華論の註であるが、彼は巻上、これは巻下で、一具を為すものかどうかは詳検を俟たねば断言し難い。天平勝宝四年の文書に、「法華論子註、円弘、三巻」〔「奈良録」一三一頁参照〕とあるから、円弘の撰であらう。斯書は万字、大正各種蔵経に未収である。

なお、大屋徳城編『金澤遺文　中』便利堂、一九三四、解説の二頁には「七、妙法蓮華経論子注　巻下　粘葉　巻首と巻尾（竪七寸七分／幅五寸二分）」とあり、「鈔本（内典）」の部に首尾の図版が掲載されている。

㈠粘葉装の数え方とその記し方について

下巻の実見調査（二〇一六年七月八日）による成果については、簡潔ながらすでに拙稿において記した通りであるが、[28] その一つとして「下巻二四紙（一紙四面）中、三紙二面（第一一紙、第一二紙一―二面、第一九紙、第二〇紙）



〈図①〉粘葉装について

が欠損していることを新たに確認した」ということも指摘している。しかしながらそこでは、この表記の仕方について具体的な説明を怠っていたために、ここに補っておくことにしたい。

粘葉装（または胡蝶装）[29]の装訂については、井上宗雄氏が「料紙を一枚一枚半折りにし、表を内側にして二つ折りとして重ね揃え、重ねられた折り目の外側を、上から下まで三―一〇㍉ぐらいの幅で糊をつけて重ねたもの」[30]と述べている通りであるが、『子注』下巻の場合は、この糊付けされているところ（〈図①〉の点線部分）に丁数が記されているのである。

それで、そこのところを、光をあてるなどして見てみると、隠れて見えなかった丁数が透けて見えるのである。このような方法で、下巻を見てみると、例えば、〈図①〉の「隠れた丁数」のところには「法華一丁」（1d）と書かれていることが確認できるのである。

そこで問題となるのが、粘葉装の数え方と、その表記の仕方になるのであるが、筆者は、一枚の紙を半分に折ると、内側の左右と外側の左右とで、計四面（一紙四面）ができることから、便宜上その数え方を、第一紙四面（1d）、第二紙一面（2a）と表記することにしたのであ

る。

したがって、この数え方に準ずれば、「妙法蓮華経論子注巻下」と内題のある下巻の巻首は第一紙三面（本誌九頁参照）に、「同後得果故」で終わる巻尾は第二四紙一面になるのである。

ちなみに、神奈川県立金沢文庫編集『特別展　アンニョンハセヨ！元暁法師――日本がみつめた新羅・高麗仏教――』神奈川県立金沢文庫、二〇一七（以下、『日本がみつめた新羅・高麗仏教』）の八四頁に掲載されている『子注』下巻の図版は、第一紙二―三面（上段）と第一七紙二―三面（下段）である。なお、後者が択ばれている事由については後述することにしたい。

三　金天鶴氏の研究とその関連研究について――二〇一一年から二〇一五年まで――

円弘と彼の著『妙法蓮華経論子注』に関する本格的な研究は金天鶴氏によってなされてきた。

金天鶴氏の研究成果は、三本の主要論文（資料名㋺・㋩・㋕参照）を軸に、これを三期に分けることができる。ここでは、氏の研究発表や学術論文など、一連の研究成果を一括し、またこれに直結する関連研究をも含めて、その一覧を示しておくことにしたい。

これを整理すると次の通りである。

㈠第一期（二〇一一年―二〇一二年）

㋑金天鶴、金沢文庫所蔵、円弘の『妙法蓮華経論子注』について、日本印度学仏教学会第六十二回学術大会、二〇

一一年九月八日、龍谷大学（大宮学舎）

㋺金天鶴、**金沢文庫所蔵、円弘の『妙法蓮華経論子注』について**、『印度学仏教学研究』第六〇巻第二号、日本印度学仏教学会、二〇一二年三月二十日、一五四―一六一（七一二―七一九）頁。

㈡第二期（二〇一三年―二〇一四年）

㋩金天鶴、もう一つの新羅僧侶『法華経論』注釈書について（韓国語）、金剛大・東国大ＨＫ事業団共同国際学術大会「忘れられた韓国の仏教思想家――新資料の発掘と思想の発見――」、二〇一三年十一月三十日、大韓仏教曹溪宗曹溪寺歴史文化記念館国際会議場

㋥金天鶴、もう一つの新羅僧侶『法華経論』注釈書について（韓国語）、金剛大人文韓国（ＨＫ）事業団・東国大人文韓国（ＨＫ）事業団編『忘れられた韓国の仏教思想家――新資料の発掘と思想の発見――』金剛大人文韓国（ＨＫ）事業団・東国大人文韓国（ＨＫ）事業団、二〇一三年十一月二十九日、二七五―二八六頁。

㋭金炳坤、（論評）「もう一つの新羅僧侶『法華経論』注釈書について」を読んで（韓国語）、金剛大・東国大ＨＫ事業団共同国際学術大会「忘れられた韓国の仏教思想家――新資料の発掘と思想の発見――」、二〇一三年十一月三十日、大韓仏教曹溪宗曹溪寺歴史文化記念館国際会議場

㋬金炳坤、（論評）「もう一つの新羅僧侶『法華経論』注釈書について」を読んで（韓国語）、金剛大人文韓国（ＨＫ）事業団・東国大人文韓国（ＨＫ）事業団編『忘れられた韓国の仏教思想家――新資料の発掘と思想の発見――』金剛大人文韓国（ＨＫ）事業団・東国大人文韓国（ＨＫ）事業団、二〇一三年十一月二十九日、二九七―三〇二

円弘撰『妙法蓮華経論子注』研究史概観（金炳坤）

頁。

㋣金天鶴、**円弘は新羅僧侶か――『法華経論子注』の引用文献を中心として**（韓国語）、『東アジア仏教文化』第一七輯、東アジア仏教文化学会、二〇一四年三月三十一日、一八五―二〇八頁。

㋤金天鶴（金炳坤訳）、円弘は新羅僧侶か――『法華経論子注』の引用文献を中心として、『身延山大学仏教学部紀要』第二〇号、身延山大学仏教学部、二〇一九年十月十三日、一――一六頁。

㈢第三期（二〇一四年―二〇一五年）

㋥金天鶴、『法華経論子注』の文献の流通と思想について――聖語蔵本と金沢文庫本を中心として――、佛教與東亞宗教寫本研究國際研討會――新視野與新方法――、二〇一四年十二月十七日、峨眉山大仏禅院法堂

㋦金天鶴、『法華経論子注』写本の流通と思想（韓国語）、東国大学校人文韓国（ＨＫ）研究団　二〇一五年第四回ＨＫアジェンダ学術大会「グローカリティーの韓国性――横断性の探索――」、二〇一五年六月五日、東国大学校忠武路映像センター仏教学術院講義室（本館二二七号）

㋧金天鶴、『法華経論子注』写本の流通と思想（韓国語）、東国大学校仏教文化研究院ＨＫ研究団編『グローカリティーの韓国性――横断性の探索――』東国大学校仏教文化研究院ＨＫ研究団、二〇一五年六月五日、三三―四九頁。

㋨蓑輪顕量、（討論文）金天鶴「『法華経論子注』写本の流通と思想について」のレスポンス、東国大学校人文韓国（ＨＫ）研究団　二〇一五年第四回ＨＫアジェンダ学術大会「グローカリティーの韓国性――横断性の探索――」、

二〇一五年六月五日、東国大学校忠武路映像センター仏教学術院講義室（本館二二七号）

㋕蓑輪顕量、（討論文）金天鶴「『法華経論子注』写本の流通と思想について」のレスポンス、東国大学校仏教文化研究院ＨＫ研究団編『グローカリティーの韓国性――横断性の探索――』東国大学校仏教文化研究院ＨＫ研究団、二〇一五年六月五日、五〇―五二頁。

㋖金天鶴、**『法華経論子注』写本の流通と思想**（韓国語）、『東アジア仏教文化』第二四輯、東アジア仏教文化学会、二〇一五年十二月三十一日、一五五―一八三頁。

㋗金天鶴、『法華経論子注』写本の流通と思想（韓国語）、金剛大学校仏教文化研究所・東国大学校仏教文化研究院共編『忘れられた韓国の仏教思想家』東国大学校出版部、二〇一七年四月三十日、三二五―三四九頁。

㋘金天鶴（金炳坤訳）、『法華経論子注』写本の流通と思想、『身延論叢』第二五号、身延山大学仏教学会、二〇二〇年三月二十五日、一―三二頁。　**※本誌に収録**

㋙蓑輪顕量（金炳坤付記）、金天鶴「『法華経論子注』写本の流通と思想について」のレスポンス、『身延論叢』第二五号、身延山大学仏教学会、二〇二〇年三月二十五日、三三―三七頁。　**※本誌に収録**

この十七件のうち、研究発表を除いて、活字になっている、論文、論評、翻訳等の関係性を表にまとめると次の通りである。

円弘撰『妙法蓮華経論子注』研究史概観（金炳坤）

〈表①〉『子注』研究史略年表

時期	第一期	第二期		第三期		それ以降	時期
著者	金天鶴	金天鶴	金炳坤	金天鶴	蓑輪顕量	金炳坤	訳者等
二〇一二年	㋺						
二〇一三年		㋺	㋻				
二〇一四年		㋻				㋚	二〇一九年
二〇一五年				㋹	㋾	㋛	二〇二〇年
同右				㋕		㋟	同右
二〇一七年				㋿			

これらの関係性について簡略に述べておくと、㋻は㋺の論評、㋻は㋺の修正版、㋾は㋹の論評、㋕は㋹の修正版、㋿は㋕の修正版、㋚は㋻の日本語訳、㋛は㋾の転載（筆者の付記を含む）、㋟は㋕の日本語訳である。中でも、筆者による二本の日本語訳（資料名㋚・㋟参照）では、岡本一平氏の助言もあり、単なる訳にとどめずに、*アスタリスク・〔亀甲括弧〕をもって訂正や加筆を施した。

このうち、金天鶴氏の主要論文三本の目次を挙げると次の通りである。

㋺（金天鶴［二〇一二］）

一　問題の所在

二　円弘について

三　『妙法蓮花経論子注』について

四　『妙法蓮花経論子注』の分科と思想

五　まとめ

㋣（金天鶴［二〇一四］、目次は㋒によるもの）

Ⅰ　はじめに

Ⅱ　円弘について

Ⅲ　円弘の『法華経論子注』について

1　現存本『法華経論子注』紹介

2　引用文献の検討

Ⅳ　結論

㋕（金天鶴［二〇一五］、目次は㋟によるもの）

Ⅰ　はじめに

円弘撰『妙法蓮華経論子注』研究史概観（金炳坤）

Ⅱ　『子注』写本の流通と新羅著述確定
　1　『子注』写本の流通
　2　『子注』の新羅著述確定
Ⅲ　『子注』写本の底本テキストと思想
　1　『子注』写本テキスト
　2　『法華経論』テキスト
　3　『子注』の思想
　　(1)　引用文献を通してみた思想傾向
　　(2)　声聞の成仏について
　　(3)　テキストと思想の関係
Ⅳ　結論

筆者はこのうち、「『妙法蓮花経論子注』の分科と思想」（金天鶴［二〇一二］一六〇）と「『子注』の思想」（金天鶴［二〇一五］一六九―一七八）を除いて、氏によって提示されている「円弘新羅人説」（筆者の造語）に関するすべての論拠に対して再検討を行なっている。

㈣第四期（二〇一五年―二〇一六年）

それが次に挙げる筆者の研究である。

㈠金天鶴氏の『子注』研究に対する筆者の研究について

㋝金炳坤、円弘注『妙法蓮華経論子注』をめぐる諸問題、第六十八回日蓮宗教学研究発表大会、二〇一五年十一月六日、日蓮宗宗務院

㋞金炳坤、円弘『妙法蓮華経論子注』の新理解（韓国語）、韓国思想史学会・東国大仏教文化研究院ＨＫ研究団・神奈川県立金沢文庫共同主催「新羅写本と元暁」、二〇一六年八月十九日、東国大学校仏教学術院（忠武路映像センター本館）二二七号

㋠金炳坤、円弘『妙法蓮華経論子注』の新理解（韓国語）、韓国思想史学会・東国大仏教文化研究院ＨＫ研究団・神奈川県立金沢文庫編『新羅写本と元暁』韓国思想史学会・東国大仏教文化研究院ＨＫ研究団・神奈川県立金沢文庫、二〇一六年八月十九日、一―一七頁。

この研究（資料名㋠参照）では、主に、金天鶴氏が主張する「円弘新羅人説」の是非について論じているのであるが、筆者の結論は「再検討するべき余地があろう」ということである。この研究は、近いうちに日本語に翻訳する予定であるため、具体的な内容については、そこに譲ることにしたい。

またこの中では、余他の付随的な問題として、蓑輪顕量氏も指摘するところである、金天鶴氏が指摘している『法

円弘撰『妙法蓮華経論子注』研究史概観（金炳坤）

華経論』の第三のテキスト（＝第三の形式）の問題や、『子注』を直接引用する初見が奈良時代の寿霊であるとすること、[33]それから、平安時代の初期以後、鎌倉時代以前の『子注』引用が見当たらないとする金天鶴氏の見解を補正しようとして、筆者が提示した『三平等義』における『子注』の直接引用などについても論じているのであるが、この二点については、その後、さらに研究を進めているため、これらについては章を改めて述べることにしたい。[34]

㈡『円弘師章』に関する岡本一平氏の研究について

なお、円弘のもう一つの著作として知られる『円弘師章』については、岡本一平氏の次の研究がある。

㈠岡本一平、『円弘章』の逸文研究、日本印度学仏教学会第六十七回学術大会、二〇一六年九月三日、東京大学（本郷キャンパス）

㈡岡本一平、円弘撰『円弘師章』の逸文研究、『身延論叢』第二五号、身延山大学仏教学会、二〇二〇年三月二十五日、三九―八九頁。　**※本誌に収録**

一言付け加えさせていただくならば、筆者も研究協力者の一人として係わらせていただいた、福士慈稔氏の「日本仏教各宗の新羅・高麗・李朝仏教認識に関する研究」では、円弘を新羅人と見なし得るだけの根拠を持ち得ていなかったために、[35]彼を調査対象から外し、逸文の集成は行なわなかったという経緯がある。それゆえ、無から有を生み出している本逸文研究は、パイオニア的存在として後世にその名を遺すことになると考えられる。[36]

四　その後の研究について――二〇一六年から二〇一七年まで――

筆者によって解明できたことは、『子注』所引の『法華経論』のテキストが日本の和刻本に相似しているということ。それから『三平等義』が『子注』を題材にしているということである。

㈠『法華経論』の第三のテキストについて

この点については、拙稿（［二〇一六］一二―一六、資料名㋔）において、すでに論及した通りである。これに関係するものとしては、筆者と桑名法晃氏の次の研究がある。

㋕金炳坤・桑名法晃、義寂釈義一撰『法華経論述記』の文献学的研究(1)、『身延山大学仏教学部紀要』第一五号、身延山大学仏教学部、二〇一四年十月十三日、一九―四三頁。

㋖金炳坤、流布本『妙法蓮華経優波提舎』考、日本宗教学会第七十五回学術大会、二〇一六年九月十一日、早稲田大学（戸山キャンパス）

㋗金炳坤、流布本『妙法蓮華経優波提舎』考、『宗教研究』第九〇巻別冊、日本宗教学会、二〇一七年三月三十日、三〇六―三〇七頁。

㋘桑名法晃、『法華論』版本の研究――清水梁山国訳『法華論』の底本を視点として――、『東洋文化研究所所報』第二〇号、身延山大学東洋文化研究所、二〇一六年四月一日、一七―六二頁。

円弘撰『妙法蓮華経論子注』研究史概観（金炳坤）

㈡『子注』と『三平等義』の関係について

拙稿（［二〇一六］一六―一七、資料名㋔）の中で取り上げている『子注』と『三平等義』の関係については、その後も研究を続け、筆者なりの答えを出している。これに関係するものとしては、筆者の次の研究がある。

㋓金炳坤、『三平等義』の成立に関する研究、『身延山大学仏教学部紀要』第一七号、身延山大学仏教学部、二〇一六年十月一日、一―三四頁。

㋕金炳坤、59 ⊙ 妙法蓮華経論子注　巻下　一帖（資料解説）、神奈川県立金沢文庫編集『特別展　アンニョンハセヨ！元暁法師――日本がみつめた新羅・高麗仏教――』神奈川県立金沢文庫、二〇一七年六月二十四日、九六頁。　※⊙は国宝を示す（以下同様）

㋖金炳坤、最澄と『妙法蓮華経論子注』、元暁生誕一四〇〇年記念共同学術大会「元暁と新羅仏教写本」、二〇一七年六月二十四日、金沢文庫大会議室

㋗金炳坤、最澄と『妙法蓮華経論子注』、神奈川県立金沢文庫・東国大仏教文化研究院ＨＫ研究団編『元暁と新羅仏教写本』神奈川県立金沢文庫・東国大仏教文化研究院ＨＫ研究団、二〇一七年六月二十四日、四一―八一頁。

㋘金炳坤、『三平等義』所引の「注云」について、日本印度学仏教学会第六十八回学術大会、二〇一七年九月二日、花園大学

㋙金炳坤、『三平等義』所引の「注云」について、『印度学仏教学研究』第六六巻第一号、日本印度学仏教学会、二〇一七年十二月二十日、二七四―二六九（二一九―二二四）頁。

拙稿（［二〇一七］八〇―八一、資料名㋐）の中に収録されている韓国語の要約文に、筆者が《子注研究》に与るようになった事情や、『子注』と『三平等義』の関係が簡明に述べられているために、これを日本語に翻訳（※資料名㋐における研究成果を踏まえて大幅に改訂した）して研究の用に供することにしたい。

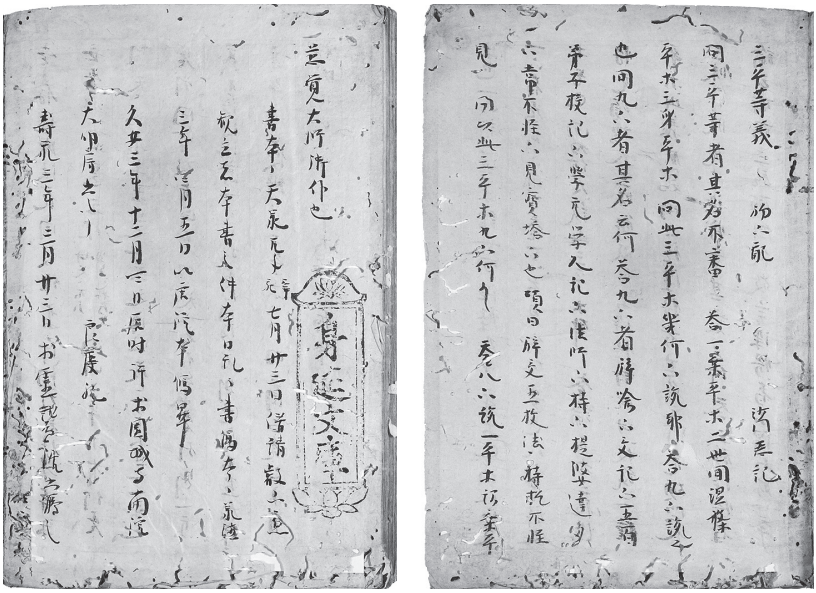
㈠要約文の翻訳

円弘と彼の著『妙法蓮華経論子注』については、金天鶴博士によってこれまでに多角的な検討がなされてきており、それらを通して金天鶴博士は、円弘を新羅出身の僧侶であると規定している。しかしながら、かのうな研究成果に対する筆者の綿密なる検証によれば、円弘の出身国は、いまだ新羅と唐のいずれの可能性も排除することはできないと考えられる。

円弘の思想はもちろん彼の国籍を明確にするためには、円弘に関する多様なる資料を蒐集する必要があるが、現在までに知られている資料はごくわずかに過ぎず、このような資料でさえも、彼の国籍を究明し得る資料としての価値は希薄であると言わざるを得ない。

筆者は、法華章疏に関する全般的な研究をテーマとしており、金天鶴博士は、筆者が二〇一二年に立正大学に提出した博士学位請求論文『法華章疏の研究――海東撰述・西域出土本を中心として――』の副査を務めたのである。

かような縁により、筆者は、金天鶴博士が制作した『子注』上・下巻の翻刻データのチェック及び典拠の確認などの作業を依頼（二〇一五年十一月二十五日）されたのである。この作業を進めていく過程で筆者は、日本撰述の章疏における『子注』引用を調査中に、『三平等義』において『子注』が相当数盗用されていることをはじめて知り得たの



〈写真①・②〉身延文庫蔵『三平等義』（右・一丁オ、左・三二丁ウ）

である。

本研究では、円仁（七九四―八六四）と、彼の弟子である安然（八四一―八八九？）の、共同作業によるものと考えられる『三平等義』と『子注』との総合的な比較分析を通して、『三平等義』における『子注』の位相を明確にしている。

具体的には『三平等義』において「注云」或いは「如注」と明記されている部分が『子注』と対応関係にある（安然注か）ということ。また典拠を明かしてはいないが、問答形式の文献である『三平等義』の前半部に位置する本文の問答中、答に該当する部分が『子注』と対応関係にある（円仁記か）ということ。加えて安然は『子注』を引用及び採用しているが、円仁の場合は、『子注』と同文を有する常騰（七四〇―八一五）の『法華論注』との関係からして、円弘と常騰のうち、どちらを依用したかについては不明確であるということなどを指摘している。

併せて『三平等義』における円仁と安然の記述と注記の部分を区別したのち、『三平等義』の成立背景について論証し、『三平等義』が『子注』の注釈書的性格を兼備している文献であるということを学界ではじめて究明している。

この他にも、『子注』が依拠している『法華経論』が本論の原訳に最も近しい古形であるということについては、既発表の拙稿（資料名㊦参照）において指摘した通りであるが、『子注』下巻には落丁があるために、古形を復元するという試みに困難が生じている。しかし、『三平等義』の『子注』との密接なる対応関係を考慮すれば、『子注』下巻の落丁の部分に該当する『法華経論』の引用を『三平等義』を通して復元し得るという点に着眼して、実際にこれに該当する部分を復元している。

最後に、筆者の手の届く範囲での調査に過ぎないが、証真（一一二四―一二〇八）撰『法華疏私記』において「如円弘師注法華論」と、選者と書名について言及している引用が新たに確認できたということをはじめて明かしている。

研究資料については、『三平等義』は現存している二本の写本中、最も古い伝本を写したものとみられる身延文庫本を使用し資料の信頼性を保証しており、『子注』は称名寺所蔵（神奈川県立金沢文庫管理）の現存する唯一の写本を利用し原本に基づく正確性を担保している。

㈢『法華経論子注等要文』について

金沢文庫に長文にわたり『子注』を引用する資料の存することが、道津綾乃氏によって報告されている。道津氏の発見した本資料は、氏によって『法華経論子注等要文』（以下、『要文』）と命名（仮称）されている。

円弘撰『妙法蓮華経論子注』研究史概観（金炳坤）

㋝道津綾乃、77 ⊙ 法華経論子注等要文　一冊（資料解説）、神奈川県立金沢文庫編集『特別展　アンニョンハセヨ！元暁法師――日本がみつめた新羅・高麗仏教――』神奈川県立金沢文庫、二〇一七年六月二十四日、一〇九頁。

次にこの資料解説を転載（※ローマ数字は漢数字に改めた）しておきたい。

77 ⊙ 法華経論子注等要文　一冊／袋綴装　縦二七・五　横一九・〇／十三―十四世紀　称名寺所蔵

書名は仮称である。本書は、冒頭に「同論云」と示して、婆藪槃豆（世親）釈・菩提留支等訳『妙法蓮華経憂波提舎』（通称『法華経論』）巻下の本文を大字、注釈を小字で書いた円弘撰『妙法蓮華経論子注』を、二丁[37]にわたり引用している。本書の作者は、称名寺に伝わっている『妙法蓮華経論子注』の写本（No.五九）を用いて、自説の論証を試みたようである。

［称名寺聖教四四一函一一五号二番］（道津）

現存する『子注』下巻の第一七紙二面一行目の「彼声聞等」から、第一八紙一面四行目左の「答依同義故」までに該当する、この『要文』は、その図版が『日本がみつめた新羅・高麗仏教』の一〇六頁（※便宜上、上段の図版を一頁とし、下段の図版を二頁とする）に載っているが、この『要文』との比較を容易ならしめるようとした意図からであろうか、前述の通り、同書の八四頁には『子注』下巻の第一七紙二―三面の図版が載っているために、一部ながら

『子注』との比較ができるのである。

筆者の調査では、欠損箇所を除き、次の四箇所において、その異同（**出入り**）が確認できた。

①成**仏**故（『子注』下巻、第一七紙二面一―二行目）　↓　成　故（『要文』一頁一行目）

②而　記（『子注』下巻、第一七紙二面四行目右）　↓　而**与**記（『要文』一頁三行目左）

③記**意**彼（『子注』下巻、第一七紙三面五行目左）　↓　記　彼（『要文』一頁八行目右）

④仏　名（『子注』下巻、第一八紙一面一行目左）　↓　仏**故**名（『要文』二頁五行目左）

比較的忠実な引用であることが分かるが、入りは少しく気になるところである。

同箇所は、『法華経論』に「彼声聞等、得授記者、得決定心。非謂声聞、成就法性（声聞にして授記された者は、確定した意楽（*āśaya）を得ただけであって、声聞が法身（*dharmakāya）を成就したわけではない）[38]」（『大正』二六・八下）とある件を注釈するところで、『子注』の解釈上の特色とも言える「三種の舎利弗[39]」について解釈されるところであるが、金天鶴氏が指摘するように[40]、ここは、まるで自説であるかのように『子注』を引いている常騰の『法華論注』[41]と、これを引く、称名寺第三代長老湛睿（一二七一―一三四六）や、彼と長く行動を共にしてきた霊波（一二九〇―一三七七）もが注目していたところである。ここが『子注』の特異な解釈として捉えられていたことの証左であろう。

後二者の事例からしても、『要文』が称名寺に伝わる由縁が窺われるわけであるが、『要文』と後二者の異なるとこ

ろは、常騰の『法華論注』の引用ではなく、『子注』の引用であるという点である。

また『要文』の引用は、文章の途中で終わっているため、続きの発見や、その他の何らかの展開が俟たれるところである。

五　結語

かくして本稿では、円弘、并びに『子注』に関する従来の研究成果を網羅的に紹介しながらこれを概観してきた。

さて、今年度の日本印度学仏教学会において、金天鶴、岡本一平、道津綾乃の各氏と、筆者とで、《円弘研究》の今後の方針について話し合う機会があった。特集号の企画はそこから始まっている。

そもそも韓国では、日本と違って《法華研究》はさほど盛んではなく、しかも『子注』そのものの翻刻文や電子データも未公開で、写本も手にし難く、限られた人にしか閲覧できない状況であったこともあり、金天鶴氏が韓国語で発表した二本の論文（資料名㋒・㋕参照）は、おそれながら期待値を下回る反応であったと認識している。

そこで、学術情報へのアクセスの確保のために、つまりは、言葉の壁を越え、土壌を変えるべく、この二本の論文を筆者が日本語に翻訳することになったのである。これで、氏の主要論文三本はすべて日本語（資料名㋺・㋖・㋟参照）で読めるようになったのである。

先も触れたように、《円弘研究》が次の段階に向かって躍進していくためには、まずもって、現存する『子注』上・下巻のテキストの公開が優先されねばならないが、それを拒んでいるのは、筆者の怠慢以外の何ものでもない。

現状で言えば、金天鶴氏が制作した『子注』上・下巻の翻刻データの、筆者のチェックは了しているが、氏の韓国

語で作成した注記の翻訳や、岡本一平氏が指摘（本誌六六頁参照）するように、典拠の調査が未尽であるところもあるために、公開までにはしばらく時間を要することになると考えられる。

それに、筆者の注意が別のところ――『法華論疏』・『妙法蓮華経纘述』と『法華経論述記』・『妙法蓮華経論子注』の関係――に向いていることもあり、この点が、急務であるテキストの公開を邪魔するものとでも、言い訳しておこう。

とは言え、この特集号をもって、第一期から第四期までの計七本中、金天鶴氏の論文三本、蓑輪顕量氏の論評一本、岡本一平氏の論文一本、筆者の論評一本と、残すところは、あと筆者の論文一本の翻訳のみとなったため、一冊の本にするならば、《研究篇》は一応目途がついたことになるのである。

金天鶴氏のこだわるところの、円弘の出自をめぐる問題もしかり、いまだ多くの課題が残っている《円弘研究》の進展のためにも、本腰を入れてエフォートを割いて、地道な調査と諸説の精査に、一意奮闘する他ないだろう。偉大な議論を打ち立てるには、一つの小さな問題に集中しなければならないということである。

最後に、東アジア仏教における『法華経論』の展開を論ずる上で、本稿が一助になれば幸いである。

註

（1）松森秀幸「『法華伝記』の成立年代と「釈志遠伝」の位置づけについて」『印仏研』第六八巻第一号、二〇一九、二四四頁参照。

（2）智顗（五三八―五九七）説・灌頂（五六一―六三二）述『妙法蓮華経玄義』巻第十下に「又法華優波提舎中。明法華経理円教。極無所欠少」（『大正』三三・八一三中）とある。なお、智顗著作における『法華経論』引用については、後註十

六を参照されたい。

（3）Yenshu Kurumiya「A Note of the Seventeen Distinctive Names of Saddharmapuṇḍarīkasūtra」『印仏研』第二五巻第二号、一九七七、九七六―九七四頁参照。

（4）先学（奥野光賢『仏性思想の展開――吉蔵を中心とした』『法華論』受容史――』大蔵出版、二〇〇二、五四―五五頁、注二二参照）の指摘通り、吉蔵著作における「晩見」という用例は、最初の法華註疏とされる『法華玄論』（平井俊榮『法華玄論の註釈的研究』春秋社、一九八七、一二頁参照）と最晩年の著述とされる『大乗玄論』にしか出てこない。それゆえ、「晩見」が「晩年」を指すかというのは曖昧さの残る問題である。

（5）吉蔵撰『法華玄論』巻第一「晩見法花論明仏性義有七文」（『大正』三四・三六七中）

（6）法雲撰『法華義記』巻第五「而今此教未明此理故名復倍上数以為涅槃」（『大正』三三・六二四下）、同上「然法華経所明法身者不同常住也」（『大正』三三・六二九上）、『法華玄論』巻第二「光宅雲公言。猶是無常。所以然者教有五時。唯第五涅槃是常住教。四時皆無常。法華是第四時教。是故仏身猶是無常。又此経自説無常如下文言。復倍上数雖復称久終自有限。故知無常」（『大正』三四・三七二上）

（7）『法華玄論』巻第二「故法華論云。復倍上数者示現如来常命。方便顕多数過上数不可知故也。余見此文悲喜交至也」（『大正』三四・三七七下）

（8）平井俊榮前掲書、六七頁、注一参照。

（9）基撰『妙法蓮華経玄賛』巻第五本「声聞類異者。論云声聞有四。一決定。二増上慢。三退菩提心。四応化。如来与二授記。謂応化・退菩提心者。除決定・増上慢者根未熟故。如来不与記。菩薩与記。菩薩与記者方便令発心故。常不軽記是。此言未熟者増上慢者可爾。趣寂畢竟不熟云何言未熟。未者不也」（『大正』三四・七四二中）

（10）この用語の初出は、澄観（七三七―八三八）述『貞元新訳華厳経疏』（『卍続蔵経』五・五五上）であるとみられる。

（11）勝呂信静「窺基の法華玄賛における法華経解釈」坂本幸男編『法華経の中国的展開』平楽寺書店、一九七二、三四四頁参照。

（12）「七喩」という表現は、『妙法蓮華経玄義』（『大正』三三・七七一下）が初出とみられるが、「法華七喩」というふうに術語にしたのが誰なのかは不明である。

(13) 饒宗頤主編・王素・李方著『魏晉南北朝敦煌文獻編年』新文豊出版公司、一九九七、一九〇頁に「大魏永安元〔五二八〕年歳次戊申十二月　洛陽永寧寺訳／執筆人比丘僧辯」（※引用文中、〔亀甲括弧〕は筆者によるもの。以下同様）とあり、菩提留支等訳『妙法蓮華経憂波提舎』の題記と推定される敦煌出土の断簡が知られている。なお、本論の訳出をめぐっては、『歴代三宝紀』（『大正』四九・四四上、八六中）によれば、勒那摩提訳に関しては、永平元（五〇八）年の洛陽であったと伝えているが、菩提流支訳に関しては、永平二年以降の洛陽及び鄴での訳業を伝えるだけで、その年は記されていない。一方、後者については、望月信亨氏が指摘（同上編『望月仏教大辞典第五巻』世界聖典刊行協会、一九三三、四八〇六頁参照）するように、慧影（？―六〇〇）の『大智度論疏』に「法華論留支三蔵。以景明二年欲翻。為有小小国不寧事故不得訳。但出要意一巻云（法華論は留支三蔵、景明二〔五〇一〕年を以て翻ぜんと欲せしも、小小国に不寧の事ありしが為の故に訳するを得ず、但だ要意一巻を出せり）」とあり、これについて氏は「当時流支未だ来朝せざれば是れ亦正しからずといふべし」とコメントしているが、厳密に言えば、彼らの洛陽に在った年が伝わるだけで、来中の年は不明であるため、軽視できない記録であると考えられる。

(14) 岡本一平「浄影寺慧遠における初期の識論」金剛大學佛教文化研究所編『地論宗の研究』国書刊行会、二〇一七、五八五頁、注一二三に「達摩鬱多羅（法上）の逸文（大正三三、八一三下）は、「決定聲聞」の語を使う」とある。出典未詳であるため、どこまでが法上の語にあたるものか判然としないが、留意するべき指摘であると考えられる。ちなみに、智顗説・灌頂述『妙法蓮華経文句』巻第三下には「達磨鬱多。将此九種会法華中十如」（『大正』三四・四二下）とあり、彼が『大智度論』の「九種法」をもって『妙法蓮華経』の「十如是」を会したことを伝えている。詳しくは、加藤勉「法華三大部に於ける達磨鬱多羅の引用文について」大久保良順先生傘寿記念論文集刊行会編『仏教文化の展開』山喜房仏書林、一九九四、一九三―一九四頁参照。

(15) 『法華経論』巻上には「所作成就者。此有二種。一者功徳成就二者智慧成就」（『大正』二六・三下）と、『法華義記』巻第四には「今就有為果中有二種。一者功徳二者智慧。但功徳智慧此二難明。分別之相現顕涅槃義記」（『大正』三三・六一九中）とあり、類似する文例がみられる。

(16) ただし智顗の場合は、藤井教公「天台智顗の『法華経』解釈――如来蔵仏性思想の視点から――」勝呂信静編『法華経の思想と展開』平楽寺書店、二〇〇一、三五九頁に「『法華経論』は智顗の与り知らぬところで、灌頂の手によって吉蔵の

疏を指南にしながら引用されたのではないか」と推定されている。

(17) 崔鉉植校注『校勘　大乗四論玄義記』佛光出版社、二〇〇九、五五頁参照。

(18) ここに、日真（一四四四―一五二八）の『科註妙法蓮華経論』を加えるべきかは今後の課題としたい。

(19) 金炳坤「『法華宗要』の成立について」『印仏研』第六〇巻第一号、二〇一一、五三三―五二八頁参照。

(20) 金炳坤「義寂釈義一撰『法華経論述記』について」『印仏研』第六三巻第一号、二〇一四、五一〇―五〇五頁参照。

(21) 金炳坤「寂撰『法華経集験記』をめぐる諸問題」『印仏研』第六八巻第一号、二〇一九、三二一―三一五頁参照。

(22) 金炳坤「憬興撰『法華経疏』の逸文について」『印仏研』第六二巻第一号、二〇一三、五〇八―五〇三頁参照。

(23) 金炳坤「海東における法華天台思想史の展開」三友健容博士古稀記念論文集刊行会編『智慧のともしび――アビダルマ佛教の展開――　中国・朝鮮半島・日本篇』山喜房佛書林、二〇一六、一五九―一六一頁参照。

(24) 石田茂作編「奈良朝現在一切經疏目録」石田茂作『寫經より見たる奈良朝佛教の研究』東洋文庫、一九三〇、一一一、一三一頁、通し番号、二一三六（〔天平〕宝子七〔七六三年〕）、二一三七（〔天平〕勝宝五〔七五三年〕）、二五四八（天平二〇〔七四八年〕）、二五四九（〔天平〕勝宝四〔七五二年〕）参照。ただし、三浦周行編『傳教大師傳』御遠忌事務局、一九二一、四七―四八頁に「天平二十年六月十日の写章疏目録にも法華論子注、〔法華疏〕略述、要略、字釈〔記〕、料簡、玄義、疏談、疏義記等種々なる法華経研究資料の存在せしことを伝へ、奈良朝に於ける法華経が、諸経典の間に在りて重要なる一大要素たりしこと疑を容れず」（※引用文中、旧字体は新字体に改めた。以下同様）とあるように、東京帝國大學文科大學史料編纂掛編『大日本古文書　三』東京帝國大學、一九〇二、八四頁にみられる、この天平二十年の『子注』の最古の記録に初めて触れているのは三浦周行氏のようである。

(25) 日下大癡「法華論に就て」『龍谷大學論叢』第二六九号、一九二六、六頁（三浦周行前掲書に言及する）、鹽田義遜「法華論の研究」『棲神』第二八号、一九四三、五―六頁（「奈良録」を参照する）、江利山義顕編『日蓮宗読本』日蓮宗宗務院、一九五七、七七頁参照。

(26) 金天鶴「金沢文庫所蔵、円弘の『妙法蓮華経論子注』について」『印仏研』第六〇巻第二号、二〇一二、一六一頁、注五に「二〇〇八年に書かれた個人のホームページ http://kagemarukun.fromc.jp/page013.html に円弘が新羅人だろうと推定している」とある。そこには「新羅人の唯識派の僧であったかもしれない」と記されている。

(27) 大屋徳城「金澤文庫を過ぐ」『中外日報』一九三三年十月（筆者未見）、大屋徳城編「金澤訪書記（金澤文庫を過ぐ）」『金澤遺文　下』便利堂、一九三四、六頁に収録。大屋徳城『佛教古板經の研究』国書刊行会、一九八八、三二六―三二七頁に再録。なお、下巻に限って言えば、大屋氏に先んずる惠谷隆戒氏の紹介がある。同上「最近發見したる圓頓戒並に天台學關係の資料に就いて」『叡山學報』第七輯、一九三三、二五四頁参照。

(28) 金炳坤「円弘『妙法蓮華経論子注』の新理解」韓国思想史学会・東国大仏教文化研究院ＨＫ研究団・神奈川県立金沢文庫編『新羅写本と元暁』韓国思想史学会・東国大仏教文化研究院ＨＫ研究団・神奈川県立金沢文庫、二〇一六、三―四頁参照。

(29) 井上宗雄他編著『日本古典籍書誌学辞典』岩波書店、一九九九、二二二頁に「粘葉装と同じと考えられている。一枚ずつ開けると、ちょうど胡蝶が羽を開いたようになるところからの呼称といわれている」とある。参考までに「ｅ国宝」に粘葉装（要再考）として、奈良国立博物館蔵『紙本墨書七大寺日記』一帖（http://www.emuseum.jp/detail/100054）の画像が公開されている。

(30) 井上宗雄前掲書、四〇六頁参照。

(31) 蓑輪顕量「（討論文）金天鶴「『法華経論子注』写本の流通と思想について」のレスポンス」東国大学校仏教文化研究院ＨＫ研究団編『グローカリティーの韓国性――横断性の探索――』東国大学校仏教文化研究院ＨＫ研究団、二〇一五、五一頁（本誌三四―三五頁）参照。

(32) 金天鶴「『法華経論子注』写本の流通と思想」『東アジア仏教文化』第二四輯、二〇一五、一六九頁（本誌一六頁）参照。

(33) 金天鶴前掲論文、二〇一二、一五九頁参照。

(34) 金天鶴前掲論文、二〇一五、一五八頁（本誌四頁）参照。

(35) 福士慈稔『日本天台宗にみられる海東仏教認識』身延山大学東アジア仏教研究室、二〇一一、二三頁、注三参照。ちなみに、注四は筆者によるものである。

(36) なお、岡本氏が集成した逸文①と⑧に関しては、先行研究（太田久紀「日本唯識研究――『唯識分量決』と『四分義極略私記』――」『印仏研』第二一巻第一号、一九七二、二五五頁、同上「日本唯識における四分義の展開」『南都仏教』第三〇号、一九七三、三八―四一頁参照）において論及されていることを指摘しておきたい。

(37) 前丁は裏面に、後丁は表面に記されているため、正確に言えば、二丁（四面）のことではなく、二丁（二面）のことである。この点については、道津綾乃氏に「二ページ」と確認（二〇一九年九月十一日）をしていただいた。ここに記して深謝申し上げたい。

(38) 大竹晋校註『法華経論・無量寿経論　他』大蔵出版、二〇一一、二七六頁参照。

(39) 金天鶴前掲論文、二〇一五、一七四―一七七頁（本誌二一―二三頁）参照。

(40) 金天鶴前掲論文、二〇一二、一五七―一五九頁参照。

(41) 金炳坤「『三平等義』の成立に関する研究」『身延山大学仏教学部紀要』第一七号、二〇一六、二五―二六頁参照。

〈キーワード〉
海東仏教、法華章疏、法華経論、法華経論子注、円弘師章、三平等義、法華経論子注等要文

〈謝辞〉
特集号にあたり、ご協力いただきました関係各位に深謝申し上げます。（五十音順、敬称略）
飯田剛彦、石岡俊一、岡本一平、神奈川県立金沢文庫、河又浩昭、金鍾旭、金天鶴、宮内庁正倉院事務所、桑名法晃、称名寺、東国大学校仏教文化研究院ＨＫ研究団、道津綾乃、林是恭、身延文庫、蓑輪顕量